(6) 結果のまとめと指導改善のポイント

ア 授業に対する関心、理解、有用性について

① 知的好奇心を喚起する授業づくり

「各教科の勉強は好き」という問いに対して肯定的な回答をした児童生徒の割合は、多くの教科で前年度を下回っている。「各教科の勉強は好き」という意識は、児童生徒が学習に向かう推進力となることから、それぞれの教科の特性に応じて、児童生徒の知的好奇心を喚起するような授業づくりの工夫が望まれるところである。具体的には、児童生徒と教材との出会わせ方を工夫すること、取り組む学習活動に対して児童生徒が必然性を感じることができるようになること、1単位時間や単元の見通しをもたせることなどが考えられる。

② 分かる授業の推進と学習内容の定着を図る工夫

「各教科の授業の内容はよく分かる」という問いに対して肯定的な回答をした児童生徒の割合は、17教科中8教科で前年度を上回っている。授業に対する理解度は、授業の根幹ともいえる部分であり、「分からない」と回答している児童生徒がいる場合には、迅速かつ適切な対応が必要である。また、児童生徒が「分かる」と回答しているにも関わらず、該当教科の正答率が低い場合には、学習内容の定着が十分でないことが考えられる。その際は、授業において学習内容の定着を図ることができるように指導方法を見直すことや家庭学習の内容や方法について見直しを図ることが必要である。

③ 活用力を高める指導の工夫

「各教科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」という問いに対して肯定的な回答をした児童生徒の割合は、17教科中9教科で前年度を上回っている。学習したことに対する有用性は、学校での学びだけにとどまることなく、生涯にわたって児童生徒が学び続けていくための推進力となる。児童生徒の「役に立つ」という意識は、授業の中で、他の学習場面や他の教科・領域との関連を意識させること、日常生活とのつながりに気付かせること、学習したことを活用させる場면을意図的に位置付けることなどによって育まれる。平成27年度から取り組んでいる「児童生徒の活用力向上研究指定事業」では、今年度、新たに8校区25校を指定し、県内16校区47校で研究が推進されている。このような先進的な取組等も参考にしながら、児童生徒の活用力を高め、児童生徒に学ぶことの大切さを実感させることができるような指導を工夫する必要がある。

イ 学校における学習について

① アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた学習過程の質的改善

学校における学習活動に対する児童生徒の意識は全般的に改善が見られる。このことは、教師の指導改善に対する意識が向上していることに起因していると考えられる。国では、平成27年8月に示された「中央教育審議会教育課程企画特別部会 論点整理」とそれを受けてスタートした17のワーキンググループでの議論を踏まえて、学習指導要領改訂に向けての動きが本格化している。その中で、アクティブ・ラーニングの3つの視点（対話的な学び、主体的な学び、深い学び）を踏まえた不断の見直しと学習過程の質的改善が求められている。このような動向にも目を向けながら、児童生徒に育みたい資質・能力を明確にして、その実現のために、学習過程の質的改善を図ることが大切である。これからの教師には、「教え上手」だけでなく、「学ばせ上手」であることも望まれる。

② ICT機器を効果的に活用した授業づくり

「授業で電子黒板や大型テレビなどが使われるようになって、今までより授業の内容が分かりやすくなった」と回答した児童生徒の割合は増加しており、教師によるICT機器の活用頻度も増加している。学校において、ICT機器を効果的に活用した授業が定着していることの表れであると捉えられる。今後、学校における学習用PCの整備が進むことから、ICT機器を教師がどのように使いこなすかといった視点のみならず、児童生徒にどのように使わせるのかという視点を考えることがより重要となってくる。

ウ 家庭での学習について

① 家庭学習の量と質の充実

家庭学習の時間については、全体的に前年度を下回っているが、「自分で計画を立てて勉強している」「学校の宿題をしている」といった問いに対して肯定的に回答している児童生徒の割合が小学5年、中学2年などで増加しているなど、一部改善も見られる。家庭学習の習慣化については、小学校低学年からの家庭と連携した指導が重要である。また、児童生徒の発達の段階にもよるが、学年が上がるにつれて、「何時間行ったか」「何ページ書いたか」といったような量的な基準だけでなく、「分かるまで行ったか」「できるようになるまで行ったか」「覚えるまで行ったか」といったように家庭学習の内容を重視した質的な充実を図ることも大切である。さらに、9割以上の児童生徒が「学校の宿題をしている」という問いに肯定的に回答していることから、宿題の在り方やその内容について、教師の間で議論を交わすなどして、学校としての宿題の質を充実させることが、学習内容の定着や授業における主体的な学習の実現に有効であると考えられる。

エ 学校生活、家庭生活について

① 落ち着いた学校生活の実現とキャリア意識の醸成

「学校に行くのは楽しい」「学校では落ち着いて勉強することができている」という問いに対して肯定的な回答をした児童生徒の割合は、全体的に前年度を上回っている。一方で、「将来の夢や目標をもっている」という問いに対して肯定的な回答をした児童生徒の割合は、全体的に前年度を下回っている。全ての児童生徒が楽しく安心して学校生活を送ることができるということは、学力向上の基盤ともいえる部分であり、大切にされなければいけない。また、キャリア教育の視点から、将来の夢や目標をもたせることは、学校生活の充実、学力の向上にもつながると考えられる。特別活動や総合的な学習の時間、道徳科の充実を図ることを通して、児童生徒が集団や社会の一員としての自覚を高めたり、自己の生き方を見つめ直したりするなどの機会を大切にして指導していくことが望まれる。

② 家庭との連携による家庭生活の改善

平日にテレビやビデオ・DVDを2時間以上視聴する児童生徒の割合は小学5年、小学6年、中学3年で前年度を下回り、平日に2時間以上テレビゲームをする児童生徒の割合も小学5年で減少、小学6年、中学3年で前年度を下回るなど一部改善がみられる。一方で、平日に携帯電話やスマートフォンを1時間以上使用している児童生徒の割合は、小学5年、中学1年を除く全ての学年で前年度を上回っている。テレビゲームをする時間、携帯電話やスマートフォンを使用する時間が長くなるほど、正答率が低くなる傾向があることから、引き続き、家庭への啓発を図り、家庭との連携による家庭生活の改善を図ることが大切である。